

外国につながる 子どもの教育



▶ 2 ◀

若林 秀樹

中学教員時代の後半12年は、日本語教室を担当しました。日本語がよく分からず学校生活や授業に支障のある外国につながる子どもが、自分のクラスを離れて勉強しに来る教室で、国際教室と呼ぶ地域もあります。

担当教員は学級担任などと話し合い、子どもに合わせた指導計画や時間割を作ります。少ない子どもは週に2

日本語教室

時間、来日して間もない子どもには週に8時間以上指導します。自分のクラスから日本語教室に通う通級形式が中心ですが、担当教員が学級の授業に付き添って支援する入り込み指導という形もあります。

日本語教室は、いわゆる日本語学校とは全く違います。日本語学校は外国

実情に寄り添った指導

人留學生が自分の意思で来日、進学してこるのに対し、日本語教室の子どもは、主に保護者の意思で来日した場合がほとんどです。親が日本で働くため、一緒に連れて来られた子ども。母国で祖父母と暮らしていたが、日本に住む親に呼び寄せられた子どもなど背景はさまざま。学習意欲にも個人差があるため、子どもの実情に寄り添った指導が必要です。

あるブラジル人男子生徒を指導した時に、そのことを強く感じました。彼はひらがなを覚えるのに2カ月もかかりました。「い」と「こ」の区別がつかなくなるといった具合で、習ったことを翌日には忘れてしまうのです。一向に進まぬ状況に、彼は何か学びに障害を抱えているのかもしれないと思いました。

ところが2カ月が過ぎた頃、霧が晴れるように、彼は日本語を書いたり読んだりできるようになりました。その半年後には、周囲の子どもと不自由なく話せるようになり、翌年には漢字を使って作文まで書けるようになりました。表情も見違えるほど明るくなり、日本人の友達も増えました。

後で分かったのですが、日本に来て間もない頃、彼は自分の置かれた状況に納得できなかったのです。2カ月たち、やっと学習に向き合うことができただと思います。それに気付かず、彼の気持ちに寄り添えなかった自分をとても恥ずかしく思いました。子どもと向き合うための大切なことに国籍は関係ない。当たり前なのに気付かされました。

(宇都宮大客員准教授)

北日本新聞(富山) 2019.7.14 (日)



画・原澤美紀